

志賀(近地)禅季と泊寺について

吉 良 国 光

はじめに

建治二年(一二七六)豊後国大野荘地頭志賀泰朝と禅季の間で行われた異国警固をめぐる相論は、かつて惣領制研究において惣領制崩壊の事例として取り上げられることが多かった。しかし禅季をめぐる諸問題を総合的に見てみると、単純に惣領制で割り切ることのできない諸問題が多く含まれているように思う。本稿では、禅季をめぐる諸問題を総合的に取り上げ、その中でこの問題にも触れてみたい。

第一節 近地名・泊寺の相続をめぐって

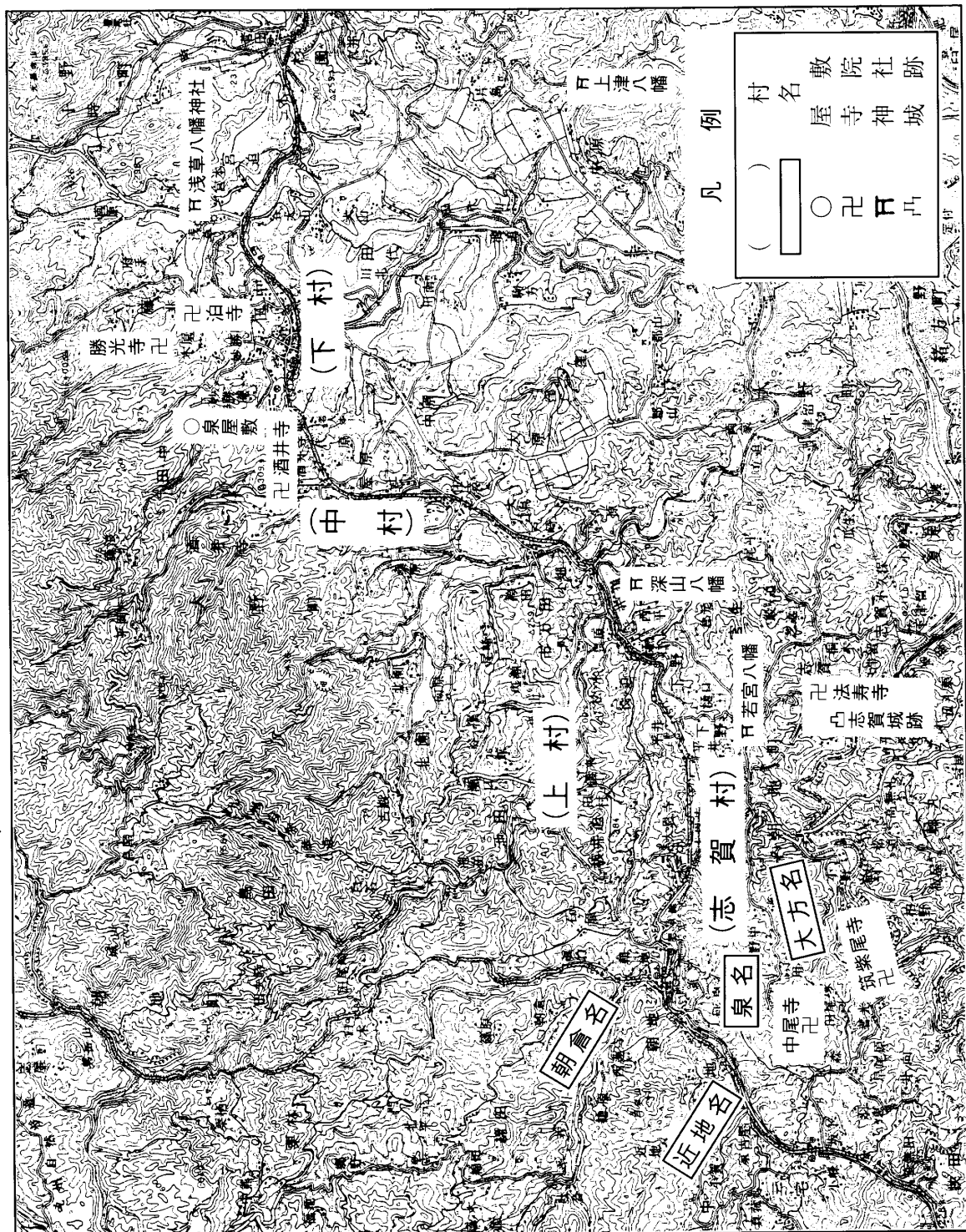
弘安八年(一二八五)の豊後国大田文案(表一)によると、大野荘の田数は三〇〇町、領家は三聖寺とある。大野荘の立券は緒方英夫によると、藤原忠通の家司源季兼が豊後守在任中の康治二年(一一四三)から久安五年(一一四九)の頃であり、忠通領として成立し、その後九条兼実から宜秋門院、更に道家へと相伝され、道家が円爾弁円に寄進し、弁円から三聖寺に寄進されて、三聖寺領として成立したとされている。一方平安末期以来大野荘に本拠地をおいた豊後大神一族の大野氏は、承元二年(一二〇八)以前反乱により所領を没収され、大野荘の地頭職は中原親能が帯し、親能から大友能直へ譲与されている。更に貞応二年(一一

表(1) 豊後国大田文案 弘安8年(1285)

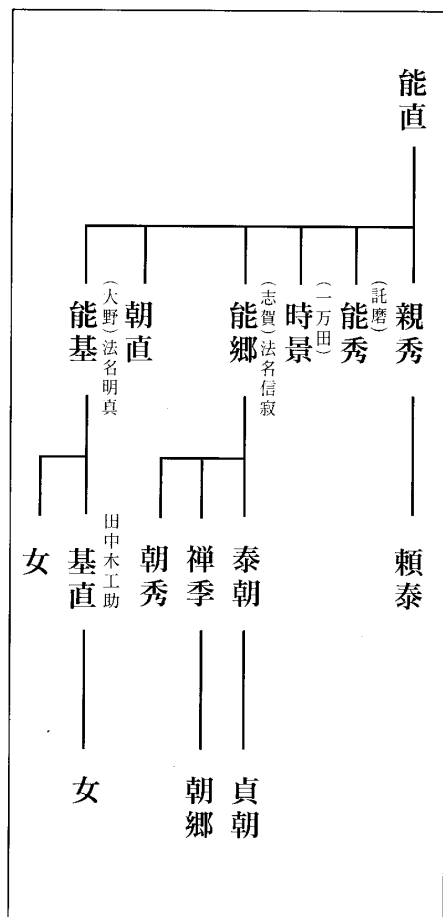
大野莊				3 0 0 町	
領家				三 聖 寺	
地頭	中村		7 6 町	戸次重頼	
	下村 (1 0 0 町)		6 9 町 9 段 小	大野基直跡同女子	
			2 2 町 1 段 3 0 0 歩	大野基直妹	
			5 町 6 段 3 0 0 歩	同氏女妹善修理亮広衡妻、今死去、子息鶴丸	
			2 町 2 段	助阿闍梨良慶	
	上村 (5 1 町)		2 5 町 5 段	横尾尼跡 (御所女房按察御局)	
			2 5 町 5 段	一万田景直跡 (同孫鶴丸)	
志賀村 (7 3 町)		北方	3 6 町 5 段	詫磨能秀、時秀・資秀・泰長	
		南方	3 3 町 1 段 小	志賀泰朝嫡子貞朝	
			3 町 3 段 (大脱力)	大輔阿闍梨禅季	

二二三)、能直は妻深妙に「数子の母堂為るの上、年来の夫婦為るに依」って大野荘地頭職と相模国大友郷地頭郷司職を譲与している。深妙は延応二年(一二四〇)大野荘地頭職を子息に分割譲与した(表二)。後掲の文永二年(一二六五)の深妙の置文(E)によると、大野庄は能直の遺言に任せて朝直に譲るはずであるが早世したので、兄能郷に「そう」(惣)を譲るべきであるが、病弱のため、男女の子息に分割譲与するとある。この譲与により、大野荘には荘全体を統括する惣地頭は存在しなくなり、分割譲与された各地頭は、それぞれ独自に各所領内において領主支配を確立していくことになる。又この惣配分状によると、下村だけが能基(明真)一人に譲られており、しかも「但故豊前々々司墓堂

(大野莊関係要図)



大友志賀氏略系図



表（2）尼深妙惣配分状 延応2年(1240)4月6日

大友親秀	相模国大友郷地頭郷司職
託磨能秀	大野庄志賀村半分地頭職（在別注文）
一万田景直	大野庄上村半分地頭職（在別注文）
志賀能郷	大野庄志賀村半分地頭職（在別注文）
豊前能基	大野庄下村地頭職 （但故豊前々々司墓堂寄付院主職）
女子犬御前	大野庄中村地頭職
女子美濃局	大野庄上村半分地頭職（在別注文）
帯刀時直後家分 （数子有り）	大野庄中村内保多田名

寄附院主職也」と但し書きが付けられている。この点について渡辺澄夫は下村には能直の墓堂や深妙の逆修の墓堂（泊寺）があり、能基（明真房）を僧としてここに入れ、二親の現当二世の供養をさせるためであり、墓堂や菩提寺の恒例臨時の法会や維持の料所として下村を譲ったとされている。又この時志賀能郷に譲られた志賀村半分（南方）の具体的な所領内容は表（三）の通りである。能郷は、病弱であつた事もあり、正嘉三年（一二五九）志賀村南方を含めて其の所領を志賀泰朝に譲与している。

表（3）志賀村名々井上家分田畠在家等中分注文 延応2年(1240)4月6日

大方名	田数7町半	本在家5家
泉名	田数2町3反半	本在家2家
近地名	田数3町3反大	本在家2家
朝倉名	田数5町1反300歩	本在家3家
御用作田2町5反内		
7反 桑原		
5反 赤瀧		
1町3反 久木（此の内1町者 酒井寺経免に寄付）		
上 家 分 在 家 田 畠	(屋敷)	
	一所	大窪五郎
	一所	羽月
	一所	大森五郎
	一所	上別当
	一所	仲五郎
	一所	米次郎入道
	一所	公文
	一所	田村次郎跡
	一所	鷹匠跡
	一所	笠四郎跡
	一所	石仏
	一所	佐多
	一所	桧物跡
	一所	清五
	一所	泉柚木

以上 名田（4名）17町9反180歩 本在家12家 上家分在家田畠15家（大方分8家）
 用作 2町5反 田 10町180歩（大方分6町4反）
 藪 7町8反（大方分2町2反）

(A) 沙彌明真^{大友能基}・藤原^{大友能基}基直連署狀^⑩

大野庄下村内於泊寺院主職者、可為帥公之沙汰、但云彼寺之勤行、云地頭之祈禱、任先例可致其沙汰之狀、如件

弘長貳年八月三日

沙彌明真^{大友能基} (花押)
藤原基直^{大友能基} (花押)

(B) 尼深妙讓狀^⑪

讓與 所領事

在豐後国大野庄内志賀村半分地頭職

右當庄者(中略)而分讓當庄於男女子息孫子等之内、於志賀村半分者、所讓與孫子太郎泰朝也、更不可有向後之妨、但此内名田壹所者、所思宛同孫子帥房禪季^{泰朝弟}也、^{在別紙}雖然於惣領者、可為泰朝之沙汰、仍為後日証文、讓狀如件、

弘長貳年八月六日

尼深妙 (花押)

(C) 尼深妙・志賀泰朝連署讓狀^⑫

豐後国大野庄志賀村内近地名地頭職并同村内筑紫尾寺事

右於彼名彼寺者、限永代、所讓與孫子帥房禪季也、更不可有向後之妨、仍付件名寺於田畠山野料田并門田門畠正用作等者、聊^毛不違、日来可為禪季之沙汰也、但於 關東御公事大番役等者、任名本公田員數、守惣領之配分、可致其沙汰、加樣所分事、禪季之父信寂房^{志賀能基}、雖可相計之、為所勞者之上、當時彌無正体之間、且禪季をハ、^{大友能基}尼并故殿か孝養報恩をもせせんかためニ、とりわき法師二成て、風早の墓堂二令置之間、如此相計者也、但先ニハ朝倉名を禪季雖讓與之、太郎泰朝強歎申之間立替彼所讓與禪季者也、(中略)

弘長三年七月二日

尼深妙 在判
藤原泰朝 在判

(D) 明真^{大友能基}書狀^⑬

成安堵御下文候、進候、為御不審、入尼御前・大友殿見參候也、加樣無相違成候事、可然御事候、尼御前御世之後、令申給候御事者、無量御久事共に候はんするに、尼御前存世之時、如此成候事、自他悦入候、兼又尼御前之御讓狀、御下文につけ具て進候、此御讓狀に付てなりたる御安堵にて候時に、今者これそ御辺の御証文にて候はんする所候、(中略)

卯月十六日

明真^{大友能基} (花押)

進上 志賀太郎殿

泰朝の舍弟禪季は(C)「尼并故殿か孝養報恩をもせせんかためニ、とりわき法師二成て、風早の墓堂二令置之間、如此相計者也」とあり、又禪季自身泊寺につき「自祖母深妙・養父明真房之○讓得之」といつてゐる。つまり禪季は明真房(能基)の養子として、「風早の墓堂」に泊寺におかれて、僧としての修行を積まされており、それは明真房の跡を受けて能直・深妙の孝養報恩、將軍家及び地頭一門の祈禱を行うためであつた。又「禪季為字文、時々雖令上洛」と云われており、恐らくは東福寺或いは三聖寺にて僧としての修行を積んでいたと思われる。このため弘長二年(一二六二)八月三日能基・基直から泊寺院主職を讓られ(A)、更にこの頃「壹通木工助殿泉屋敷御去狀」「木工助殿泉和與御狀」(後掲G)とあり、基直より泉屋敷を去り与えられている。更に三日後の八月六日、深妙は能郷が泰朝に讓つた志賀村半分(南方)の地頭職を讓り直している(B)。これには「但此内名田壹所者、所思宛同孫子帥房禪季^{泰朝弟}也、^{在別紙}」とあり、泊寺院主職の讓与と同じ頃に志賀村南方の

内の名田一所を禪季に譲っている。此の名田は(C)に「但先二ハ朝倉名を禪季雖譲與」とあり、朝倉名であったことがわかる。泊寺の譲状が能基・基直の連署になっており、泉屋敷の去状が基直から出されていることから、下村においても弘長二年以前に能基から基直への地頭職の譲與はなされていたであろう。そして禪季への泊寺をはじめとする名田・屋敷の譲与は祖母深妙と養父明真の主導のもとになされていた。

しかしこれらの寺院・屋敷・名の禪季への譲與は基直・泰朝にとって好ましいことではなかった。朝倉名の禪季への譲與に対して「太郎泰朝強歎申」した為、深妙は朝倉名を近地名地頭職・筑紫尾寺に変更して、泰朝と連署で譲り直している(C)。又同弘長二年八月二十九日深妙は、大野基直に相模国大友郷の「あら八かたやしき」を、志賀泰朝には同郷「くわす次郎かあとのたやしき」を譲っており、更に同年十一月八日には「大友の伊藤三郎かあとのやしき壹所、ならひに田壹町六反」を泰朝に譲っている。恐らくは禪季への寺院・屋敷・名の譲與に対する基直・泰朝の不満を沈めるために執られた措置であったと思われる。更に近地名地頭職の譲与に際して深妙は、禪季一期の後には別人に譲らず、泰朝子息を弟子或いは養子にして譲るべき旨言い渡しており、禪季は文永八年(一二七一)この旨契状を認めている。更に深妙は次のような置文を認めている。

(E) 尼深妙置文⁽²⁰⁾

ふこのくに大の、庄のむら／＼の事^(大友朝直)
ことの、ゆいこんにまかせて、又二らうに、むねとゆつるへかりしか^(大友朝直)
とも、さきたちぬるうへハ、しんしやくハうあに、てもあれハ、そう^(志賀能綱)
をゆつるへけれとも、いたわりの物にてあるあひた、男女の子ともに、
めん／＼にわかちゆつるところなり、た、しあいつくへき子もなく、
又上の御ためにもふちうの事あらん時ハ、たま／＼やすともあまかと^(志賀泰朝)

りわきふひんにおもふあいた、さやうのともからのあとをハ、申給て
ちきやうし、あまならひにことの、けうやうをもすへきなり、よて
のちのために、しやうくたんのことし、

文永二年二月十三日

深妙(花押)

深妙が泰朝に対して「とりわき不憫に思う」として、特別の感情を抱いていたことがわかる。それは具体的には禪季への分割譲与による所領の狭小さによるものであるが、深妙がここで「あいつくへき子もなく、又上の御ためにもふちうの事あらん」族が出来した場合、その跡を泰朝が知行するように定めたことは、後にみるように泊寺の売却・譲与の問題と大きく関係してくる。晩年の深妙が心血を注いだことの一つに、二親の孝養と一門の無為を祈るための泊寺の維持、つまり禪季への譲与とそれに伴い発生した志賀泰朝・大野基直との諸問題の解決が挙げられよう。

こうした諸問題が一応の決着をみた文永元年(一二六四)三月廿日、鎌倉幕府は泰朝に対し、「志賀村半分地頭職^{分限幕府}」を深妙の譲状(B)に任せて領掌すべき旨の安堵の下文を下している。ただ注目すべきは(D)の史料である。幕府の下文は直接宛所の泰朝に届けられず、一旦明真(大野能基)の手元にもたらされている。明真は此の幕府の下文を深妙と大友惣領家頼泰に見せた後、深妙の譲状(B)と共に泰朝のもとに遣わしている。「御不審が為」⁽²³⁾深妙と大友頼泰の見参に入れている事からも、大友一族にとってこの問題が重要な意味を持っていたことが理解できるであろう。又以上の点から深妙の譲状を添えて、幕府に対し安堵の申請を行ったのは明真であると考えられ、これにより泰朝への譲与と安堵は完結した。「尼御前存世之時、如此成候事、自他悦入候」と言う明真の言葉に、深妙をはじめとする一族がこの下文を待ち望んでいたことがわかる。唯、ここで明真がどうしてこのようなことを行ったかが問題であ

るが、大野庄地頭の精神的拠り所である泊寺・勝光寺と下村一村の領有から考えて、大野庄全体の諸問題に対し、深妙を補佐してとりまとめるような立場にあったものと思われる。しかしこうした明真の立場も惣地頭と呼ばれるような大きな権限ではなく、大野庄地頭に非常に大きな影響力を持った深妙の没後⁽²⁴⁾、分割配分された各地頭はそれぞれの一族内部で更に惣領制的展開を遂げて自立性を強め、庄地頭としての全体的まとまりは次第に失われていった⁽²⁵⁾。一方ここで禅季が明真(能基)の養子である事、又近地名・筑紫尾寺については志賀氏から、泊寺・泉屋敷については大野氏からそれぞれ譲られている事は此の後の禅季の立場を大きく規定していると考えられる。

第二節 異国警護番役の勤仕をめぐって

文永一二年(一二七五)豊後守護大友頼泰は、禅季に対し、蒙古人用心番は惣名泰朝に就いて勤仕するよう命じているが、建治二年(一二七六)閏三月一五日、禅季は異国用心已下の所役については志賀泰朝(志賀村南方惣領)の催促を止めて、惣領守護所の御催に預かりたい旨の申状を差し出している⁽²⁷⁾。それには「於大番以下田卒⁽²⁸⁾所課者、守泰朝支配、令勤仕事不及子細、至于異国防禦重事者、直宛禅季之身、預惣領守護所御催、欲令勤仕、其故者、忠失之次第、兼雖難存知、若致分限大功之時者、且預 関東注進、且為顯其名於御引付也」とある。これに対し泰朝は、深妙の讓状(B)及び惣領守護所の下知に背いている旨反論し、「脇名相離事者、広博之仁猶以被痛申者歟、況於⁽²⁹⁾弱泰朝乎、尤所賢察也、且守御廻文、自去後三月二日、以舍弟朝秀、為要害警固、雖差進香椎宮中、至禅季者、稱致訴訟之由、打留當役之間、泰朝一身之計略、不合期之條、難堪之次第也」と主張している⁽²⁸⁾。「要害警固」とあり、豊後

国は香椎地区の異国警固を担当していた⁽²⁹⁾。禅季は具体的にはこの相論により、異国警固役を勤めていないことがわかる。最初から禅季が意図的にそれをねらってこの時期に相論を起こしたのか、或いは偶然異国警固役と時期的に重なったのかは不明である。しかし禅季の主張を検討してみると大番役以下の田率所課と異国防禦を使い分けており、田率所課については泰朝の支配を守り、勤仕することを認めており、異国防禦については守護所から禅季に宛てて直接催促に預かりたい旨を申し立てる。異国防禦とは「忠失之次第」「致分限大功之時者」とある事から、文永の役で展開されたような合戦を念頭においている事は明らかであろう。或いは文永の異国合戦において、禅季の主張に該当するようなことがあり、その事が此の申状を提出するようになった直接の契機となったことも考えられる。更に後述するように、禅季が経済的に窮乏していることも、その基本的要因としてあったことは否めないであろう。

禅季が泰朝の庶子として、泰朝の惣領制的支配を受けるのは、所領について云えば近地名と筑紫尾寺に限定され、特に大番役以下田率所課の御家人役が賦課されるのは近地名三町三反大についてのみであり、筑紫尾寺には課せられなかった⁽³⁰⁾。まして大野氏から譲られ、下村内に含まれる泊寺と泉屋敷については、泰朝の惣領制的支配は及ばなかったであろう。禅季に泊寺院主職を安堵した尼深妙の下文は次の如くである。

(F) 尼深妙下文⁽³¹⁾
下

豊後国大野庄下村内泊寺院主職事

右、任明真房之讓、禅季阿闍梨早可令寺務、仍彼寺領田畠山野泉屋敷田畠等、悉領知之、限永代可相伝領掌、専修 將軍家御祈禱、殊可祈一門無為者也、為断向後違亂、所成下之如件、

文永貳年參月廿二日

尼深妙(花押)

將軍家御祈禱と一門の無為を祈ることが泊寺院主としての勤めであり、御家人役の勤仕や惣庶關係については一切触れられていない。沙彌明真・藤原基直が禪季に泊寺院主職を譲与した連署状(A)にも「但云彼寺之勤行、云地頭之祈禱、任先例可致其沙汰」とあるのみで、御家人役勤仕や嫡庶に關する文言はみられない。又、弘安八年の大田文案(表一)をみても、禪季が地頭職を持つてゐるのは近地名のみであり、筑紫尾寺・泊寺・泉屋敷については地頭職は設定されてゐない。以上から、泰朝と禪季の惣庶關係は近地名の田率賦課の御家人役を中心にして設定されており、泊寺とそれに付屬した泉屋敷については、禪季は泰朝から何の制約も受けない立場にあつたと考えられる。禪季のこうした立場が先程の異國防禦をめぐる主張の伏線としてあつたことは否めないであろう。禪季と泰朝の相論の結末を示す史料は残されていないが、恐らく禪季の主張は幕府の認めるところとは成らなかつたであろう。

第三節 泊寺・泉屋敷の売却をめぐつて

禪季は弘安六年(一二八三)泊寺と泉屋敷を大野基直後家尼善阿に売却している。次にその事に関する史料を掲げておきたい。

(G) 成重請文³³

故風早尼御前泊寺御讓狀并木工助殿泉和与御狀、慥預知了、つくしへ持下候て、田中殿より代錢卅貫文御沙汰候者、彼証文二通ハ、田中殿へ付渡まいらせて、御用途をハ、たしかに京へさたし進候へく候、若用途御無沙汰候者、此御証文等、たしかに返上すべく候、ゆめくしとけなき事有ましく候、仍為後請狀如件、

弘安七年二月廿五日

成重(花押)

(H) 僧禪季讓狀³⁴

奉讓渡舍兄志賀太郎入道殿豊後国大野庄下村泊寺院主^(奉朝)兼職事

右件寺者、自祖母深妙・養父明真^(天友能善)房之^(手)譲得之、知行領掌無相違、而

依有直用、去弘安六年之比、相逢大野太郎基直後家尼善阿、売渡直錢

肆百五拾貫文畢、爰 關東御徳政諸国平均之法出来之間、依令致其沙

汰、前司退出之刻、売地等事、關東御教書到著之程者、可置當作毛於

中之由、自上總守殿被仰出之間、存其旨之處、依脚氣所勞更免、既及

死門之間、限永代所讓進也、無他妨可令知行給之狀、如件、

永仁五年八月五日

僧禪季(花押)

泊寺・泉屋敷の売却とは、具体的には「風早尼御前泊寺御讓狀」(F)

「木工助殿泉和与御狀」等の証文類を善阿に引き渡しており、これに基

づいて善阿は安堵の申請を幕府に行つたものと思われる。ところが「さ

てハとまりのあんとの事ハ、りやうけかたより、せういてきたり候て、

六はらにてそちんにおよひて候事も、いまたさたまらず候へハ、あん

とを申候ハんとて、しゆうそのきよしやうを申候へハ、へつきのまこ太郎

殿かたより、さ、へられ候ほとに、いまたきよ状をも給候はす候³⁵」とあ

り、領家三聖寺から訴えられ、六波羅探題で相論が行われている。三聖

寺が泊寺の安堵について異論を挟んだのは、恐らくは禪季が三聖寺で僧

としての修行を行つており、泊寺が三聖寺の末寺化してゐたことに依る

ものであらう。又善阿が愁訴の挙状を申請したのに対し、戸次貞直から

支えられているが、戸次貞直は中村の地頭であつたと思われ、戸次貞直

が支え申したのは、泊寺が大野庄の地頭一門の祈禱を行うという公的性

格を帯びてゐたためであらう。これに対し善阿は「とまりの事ハ、たう

ちきやうせぬほととの事の候はん時ハ、もとのせにをもちへし候はん、そ

れかない候ハすハ、せに、あたり候はんほと、ちかちをもちせられん

とおほせられて候³⁵」と言つて、泊寺が當知行できないのであれば、錢を

返すか、或いは銭相当分の近地名を引き渡すよう求めている。こうした相論が未だ決着しない永仁五年（一二九七）徳政令が出され、泊寺は本主禪季に返還されるが、禪季は「脚氣所勞更発に依り、既に死門に及」^{③7}び、同年八月五日「泊寺院主兼地頭職」^{③8}を舎兄泰朝に譲与し（H）、間もなく禪季は泊寺にて死去している。ところが善阿は泊寺の本証文二通（弘長二年八月三日沙彌明真・藤原基直連署状、文永二年三月二三日尼深妙下文）を抑留して、泰朝に渡さず、更に泊寺分早田二段の作稻（員数五九把）につき、善阿、泰朝いずれに属するか幕府の裁許が下される以前に、倉庫を切り破り、運び取ったとして泰朝から訴えられている。結果は、正安二年（一一三〇）大友貞親の裁許が下され、いずれも善阿の敗訴となっている。^{③9}

以上、泊寺・泉屋敷の売却についてその経過を簡単に見てきたが、しかしこれらの売却は大野基直後家尼善阿にとって、単なる買得以上の特別の意味あいを持つていたと考えられる。云うまでもなく泊寺と泉屋敷は下村内にあり、泊寺は義父明真より、泉屋敷は夫基直よりそれぞれ禪季に去り渡されたものであり、それは能直・深妙の孝養報恩、將軍家及び地頭一門の祈禱を行う為である。しかし深妙生存中は保たれていたと考えられる大野庄地頭としてのまとまりも、深妙や明真の没後は次第に無くなり、分割配分された各一族毎にそれぞれ独立性を強めつつあった。こうした中において、二親の孝養と地頭一門の無為を祈ると言う泊寺の機能も次第に変質せざるを得なくなり、自立割拠しつつある各地頭の私寺Ⅱ氏寺化しつつあったものと思われる。善阿の泊寺買得は、泊寺と深い関係にある大野氏の氏寺化をねらったものと考えられ、戸次貞直が支え申したのはそれを阻止する意味があったと考えられる。結局、泊寺は永仁の徳政令と文永二年の尼深妙置文により、禪季に返却され、志賀泰朝に譲与される事となるのであるが、泉屋敷については、此の後も志賀

氏の所領としては見えず、恐らく大野氏の所有に帰したものと思われる。近地名については、深妙の指示通り正応五年（一二九二）禪季は志賀朝郷を養子として譲っている。筑紫尾寺もこの時同時に譲られたものと思われるが、筑紫尾寺については、その後志賀貞朝の所有に帰している。^{④0}一方志賀氏の所有に帰した泊寺は、正安三年（一一三〇）泰朝より嫡子貞朝に譲られている。^{④1}ここにいたっては泊寺は、深妙の二親の孝養と地頭一門の無為を祈ると言う願いとは裏腹に、志賀氏の氏寺と化しているが、下村内に存在したため支障があったと思われる。貞朝は新たに志賀村南方に法寿寺を建立し、元徳二年（一一三三）泊寺をはじめとして筑紫尾寺・中尾寺・岩屋寺を法寿寺に寄進して、家門繁昌の祈禱と先祖及び貞朝の菩提を訪わせている。^{④2}更に正慶二年（二三三三）法寿寺の修理・寺地・長老職以下のことにつき置文を認めており、^{④3}法寿寺が泊寺に代わり志賀氏の氏寺として整備された姿を窺うことができる。

むすび

深妙は、二親の孝養及び地頭一門の祈禱を行わせるため、明真房を泊寺に入れ、更に禪季を其の養子として入寺させ、大野庄地頭の精神的拠り所とした。しかし大野庄は朝直早世、能郷病弱と言う偶然的条件のため、男女の子息に分割配分されており、深妙の没後は庄地頭として全体的まとまりを欠いていたと思われる。こうした中で泊寺は早晚その性格の変化を余儀なくされ、分割配分された各地頭の氏寺化せざるを得ない運命にあったと思われる。泊寺の氏寺化をめぐる争ったのが、泊寺の存在する下村地頭で明真房の流れをくむ大野氏と志賀村地頭で禪季の惣領にあたる志賀氏であるが、結果的には志賀氏の氏寺化している。一方禪季は、僧としては、明真房の養子として修行を積んでおり、泊寺・泉

屋敷を譲与されるなど、大野氏との繋がりを持ち、武士団としての惣領制的関係においては志賀氏一族に属し、近地名・筑紫尾寺を譲与されるなど両属的關係にあった。そのため、大野氏と志賀氏の泊寺の氏寺化をめぐる争いの渦中に置かれていた。禅季と志賀泰朝の異国警固をめぐる相論には、こうした禅季の置かれた立場が微妙に反映しているように思われる。

(注)

- (1) 例えば羽下徳彦『惣領制』(至文堂、一九六六年)、福田豊彦『第二次封建関係の形成過程』(安田元久編『初期封建制の研究』、吉川弘文館、一九六四年)等。
- (2) 渡辺澄夫編『豊後国莊園公領史料集成』七卷上、大野莊史料四五号(別府大学付属図書館発行、一九九二年、以下史料四五号と略す)。
- (3) 「三聖寺領豊後国大野莊の成立と伝領に関する一試論」(『大分県地方史』一五三号、一九九四年)。
- (4) 渡辺澄夫「豊後国大野莊における在地領主制の展開」(『大分県地方史』三八・三九・四〇合併号、猶内容と体裁を若干変更して同氏著『増訂豊後大友氏の研究』、第一法規出版、一九八二年にも再録)。
- (5) 史料一五号。
- (6) 史料一九号。
- (7) 渡辺氏前掲論文。猶「豊前々司(大友能直)墓堂については、勝光寺とする上田純一「豊後大友氏の禅宗受容について」(川添昭二編『九州中世史研究』第三輯、文献出版、一九八二年)がある。従うべき見解であろう。

- (8) 史料二〇・二一号。
- (9) 史料二五号。
- (10) 史料二七号。
- (11) 史料二八号。
- (12) 史料三一号。
- (13) 史料三四号。
- (14) 史料五五号。
- (15) 史料五九号。猶、泊寺については渡辺澄夫・上田純一の前掲論文以外に、外山幹夫「大友氏と禅宗」(『九州史学』三二号、一九六五年)がある。
- (16) 史料四二号。大野町大字田中に小字として「泉」があり、現在は廃屋となっているが「大塚」と呼ばれる屋敷があり、屋号を「泉屋敷」と呼んでいた。すぐ下に分家の「大塚定」氏の家が現在もある。
- (17) 史料二九号。
- (18) 史料三〇号。
- (19) 史料三七号。
- (20) 史料三五号。
- (21) 泰朝自身禅季との相論において、後に見るように自らを「廷弱泰朝」とよんでいる(史料四〇号)。
- (22) 史料三三号。
- (23) 外山幹夫は「為御不審」を「深妙及び大友頼泰は不審として受け止めた」と解釈されている(「大友氏の惣領制」(同氏著『大名領国形成過程の研究』一九八三年、雄山閣出版)が、それでは前後の意味が矛盾すると考えられ、「御不審が為」とは、「深妙・頼泰が不安に思っているため」と言う位の意味に理解した方が適切

であろう。

- (24) 本文に述べた志賀氏・大野氏・禅季をめぐる諸問題における深妙の役割の外、詫磨氏と志賀氏の志賀村の境争いに関する深妙の役割(史料二四号)や「庄田か田六反、やしき壺所」を詫磨氏から志賀氏に譲り替えた深妙の置文(史料二四・三二号)等深妙の大野庄における影響力の大きさを窺うことができる。外山幹夫前注論文参照。又文永二年三月廿三日深妙下文(史料三六号)が現存する深妙の最後の発給文書であり、その後文永八年三月五日の僧禅季契状(史料三七号)には「故風早禅尼」とあり、この間に卒去したものと思われる。

- (25) 渡辺澄夫編『豊後国大野庄史料』解説(吉川弘文館、一九七九年)、鈴木英雄「惣領制に関する二三の問題」(安田元久編『日本封建制成立の諸前提』、吉川弘文館、一九六〇年)。

- (26) 史料三八号。

- (27) 史料三九号。

- (28) 史料四〇号。

- (29) 異国警固については川添昭二『注解元寇防塁編年史料』(福岡市教育委員会発行、一九七一年)の解説編参照。

- (30) これらの点については拙稿「豊後国大野庄における荘園制的所領構成」(『日本歴史』五八七号掲載予定)を参照いただければ幸いである。

- (31) 史料三六号。

- (32) 但し、後掲の永仁五年の僧禅季讓状(H)には「下村泊寺院主^兼地頭職」とあり、これ以降「院主職兼地頭職」として表現されている(史料九九号)。又筑紫尾寺も元徳二年の志賀正玄(貞朝)寄進状に「筑紫尾寺院主職^兼地頭職 田畠山野」(史料九九号)とあり、同

様に地頭職が設定されている。もしこれらの泊寺・筑紫尾寺に当初から地頭職が設定されていれば、大田文案に記載されているはずであり、従って弘安八年以降永仁五年までの間に地頭職が設定されたと思われる。いかなる理由により設定されたのかに就いては今後の課題としたい。

- (33) 史料四三号。

- (34) 史料五五号。

- (35) 史料五〇号。

- (36) 渡辺氏注(4)論文。

- (37) 史料五四号。

- (38) 史料五九号。

- (39) 史料六八号。

- (40) 史料七九・九九号

- (41) 史料六二号。

- (42) 史料九九号。

- (43) 史料一〇八号。

志賀(近地)禅季と泊寺について

A Study of the Relation of Zenki-Shigan to the Tomari Temple

吉 良 国 光

Kunimitsu Kira